

「家族」をめぐる読書会 第1回

2023.9.16

家族は個体維持と種族保存の交点にあり、人間(とりわけ子供)が生きていくために必要不可欠のものである。核家族は人間の普遍的な社会集合であるが、現象形態として核家族をとらえると誤解が生じる、と「社会構造」でマードックもいう。人間は一对の男女の営みによって作られるため、男女の対＝核家族が家族の原型だと勘違いしがちである。子供は男女間に誕生するが、家族は社会によって形作られるのだ。

家族の形は時代により地域により、またその社会を支えている産業によって異なっている。人力しかなかった農耕社会＝前近代では、複婚家族や拡大家族が多く見られた。工業社会の近代に入ると、核家族が望ましい家族の形となった。現在は家族の形が多様化してきた。今後、家族の形はどうなっていくのだろうか？ 近未来の家族像を想像してみたい。

第1回は、有吉佐和子「女2人、ニューギニアをいく」を手がかりに、20世紀になって文明人の仲間入りをしたニューギニア高地人を考えてみる。つい最近まで、石器時代を生きた彼(女)等も我々と同じ人間に違いなく、彼(女)等の家族生活は正否・善悪を超えて、現代人に大いに参考になるはずである。以下8行を本書から引用してみる。

「そこで、ふと思いついたのが、パンツを縫うことであつた。ネイティブにとって、衣食住に関する最初の文明との出会いが、草の葉や瓢箪からズボンに移ることだというのは、オクサプミンとシシミンを比較したとき一番明確に分ることである。P150」

「歌舞伎の舞台によく出る掘っ立て小屋。あれを想像してもらえばいい。規模も体裁も、あれとまあ似たものである。ただ違うのは、入口が二つあって、男と女の入口が別になっている。中へ入れば同じことになるのだが、暗さになれた眼でよく見ると生木がごろんごろんと転がしてあって、厳然と男女の差別をつけている。一夫多妻制で、強いものが数を集めてしまうから、弱い男どもは指を喰わえて、丸太棒の向う側を眺めているだけということらしい。P177」

ニューギニアは島の中央で2つに分かれており、西側はインドネシア領の西イリアンで、東側は独立国のパプアニューギニアである。ともに非常に大きな面積をもっている。N・ミクルホ＝マクライや畑中幸子、本多勝一、西丸震哉等の知見を借りながら、家族を考えていこう。

匠 雅音

第2回 2023.10.21

主 永松真紀「私の夫はマサイ戦士」新潮社 2006年

主 コリンヌ・ホフマン「マサイの恋人」講談社 2002年

副 デーヴィッド・リード「マサイ族の少年と遊んだ日々」どうぶつ社 1988年